



椋鳩十の書斎再現コーナー



椋鳩十文学記念館内部

始良市 じまんげな誌 ③ 椋鳩十 文学記念館

動物愛にあふれた椋先生の本がいっぱい、
ここは、人生の窓を開く場所です。

椋先生の第二のふるさと加治木

『大造じいさんとガン』一度は聞いたことのある書名ではないでしょうか。今も小学校の教科書に載っている児童文学者・椋鳩十先生の作品です。椋先生は長野県のお生まれで、種子島で教員をなさってから、加治木高等女学校へ赴任されました。それから鹿児島にずっとお住まいになり鹿児島県立図書館長などを務められました。子ども向けのお話、いわゆる動物文学を切り開いた作家と言われています。加治木町には20年ほどいらっしゃったので、ここは椋先生の第二のふるさとでもあります。

椋鳩十文学記念館は平成2年に開館し、目の前を日豊本線が通っています。その反対側は加治木郷土館、加治木護国神社など重々しい歴史を感じさせる建物が並び、ここも風格のある背の高い松の木に囲まれています。記念館の横には『自由の館』と名付けられた建物があり、ここでは児童図書を自由に読むことができます。学校帰りに子どもたちが立ち寄り、子ども連れのお母さん方が散歩がてら読み聞かせをされたり、地域の皆様に利用されていますよ。図書館のような堅苦しさはなく、本棚に置かれた本を気軽に手に取ることができます。



動物にそそぐ、やさしいまなざし

では、椋先生の作品の魅力って何でしょうか？先生の作品には、鳥、猿、鹿、熊などの動物がたくさん出てきます。それらの動物にそそぐ椋先生のまなざしのやさしさが魅力の一つ。もう一つは、当時は戦時中で、いろんな制約があつて戦争のことを書くのは非常にたいへんでした。だから、椋先生は動物にたくして戦争のことを語られたのです。私は、その二つが椋作品の魅力だと考えています。

先生の作品は頭の中で作ったものではなく、長年暮らした加治木はもとより栗野や屋久島など現地へ出かけて、実際に取材してお書きになっています。獺師さんを訪ねて、こと細かにお聞きになった取材手帳なども記念館に展示されていますから、ぜひごらんになってください。また、作品の舞台となった場所を訪ねてみると、さらに感動が深まってしまうと思いますよ。

椋先生は県立図書館長時代に『親と子の20分間読書』という運動を呼びかけられました。親と子で読書、しかも20分間というのが、なかなかいいアイデアですね。当館では読書感想文コンクールを毎年開催し、全国から500ほどの感想文が集まります。日本のシートンと言われる先生の文学の世界に親しんだら、記念館で催しているいろんなイベントにぜひ参加してください。先生の作品にアニメ化もされた『マヤの一生』というのがありますが、当館では年に1回マヤフェスタを開いています。フェスタではパネルシアターがあつたり手品があつたり、地元の加音ホールのおーけストラに子どもさんたちが知っている楽曲を演奏してもらつたりしています。さらに、子どもたちによる椋先生の作品朗読もやっています。加治木を愛し、加治木に愛された椋先生。人生の窓を開くために、ぜひ足を運びませんか。

人生の窓を開くために



立ち寄りスポット



加治木島津屋形跡

島津義弘が85歳で亡くなるまでの12年間を過ごした場所です。屋形前の堀に架けられていた欄干橋が一部移築され、敷地内には、義弘公の「墓去之地碑」や護国神社が建立されています。



加治木図書館



加治木図書館・加治木郷土館

木造平屋建ての「加治木図書館」は国の登録有形文化財に指定されていて、趣のある木造建築。隣には地元の歴史・民俗を伝える貴重な資料が収集・展示されている「加治木郷土館」があります。



語り手

ほうが 法元 隆男さん

もともと建築設計の仕事に携わっていたという法元さん。ふるさと創生資金によって設立された椋鳩十文学記念館の専門委員として、館の事業発展に長いこと力を尽くしてきた。加治木で20年間暮らし執筆された椋先生を敬愛し、オペラなど文化への造詣も深い。



詳しい地図へ
QRコード

